昭和60年3月に平和の村宣言を採択して以降、『占冠村教育を語る住民会議』が中心となり、広島・長崎の惨劇を絶対に繰り返さず核も戦争もない平和な社会を願い、村内の中学生を広島県に派遣する『広島平和体験学習事業』を毎年行っています。
今回は生徒9人・引率2人が参加しました。広島の地から学んだことや感じたことを報告していただきます。

第36回 広島平和体験学習

占冠中2年　石坂　佑都

●1日目

原爆ドームの近くにある資料館の見学や実際に被爆した方にお話を聞きました。

資料館では、原爆の爆風や熱でボロボロになっている物や当時の人たちの言葉を見て、辛い思いと戦争に対する怒りを覚えました。当時の状況を絵や写真などで見て、あまりの惨さに鳥肌が立ちました。原爆は二度と使ってはいけないものだと思いました。

被爆した方は体験したことを分かりやすくお話ししてくれました。中心部から自宅に熱で肌が焼けた人などが水を求めて来たそうです。食べ物がないため、おかゆや小麦で団子を作り汁に入れて食べたそうです。いつもおなかが減って大変だったと思います。

●2日目

ボランティアガイドの方と被爆した場所を巡り、原爆の爆風の強さなどについてお話してくれました。

原爆の爆風は爆心地から３６０メートルだと1平方メートルに15トンの力がかかるそうです。その力が建物にかかり、壁やガラスが吹き飛んだそうです。爆風の熱は鉄をも溶かす３０００から４０００度だそうです。私が実際に見たのは鉄筋コンクリートで作られた建物なので外装は原形を保っていたのですが、後に改修したそうです。熱線を浴びた人は一瞬で骨になってしまったそうなので痛いし無念だったと思います。

この悲劇を繰り返すことのないように、今回の体験について色んな人に語っていきたいと思います。

占冠中2年　石塚　葵

●1日目

広島平和記念資料館に行って原爆の被害や当時の様子を見ることができました。被爆で亡くなった方々の遺品を見て、原爆の被害や恐ろしさを改めて知ることができました。ほとんどの物は真っ黒に焦げていました。破れたり、血痕なども付いていて、改めて原爆は本当に怖い物だと知れました。もう一つは、当時の写真です。原爆での体の傷や建物の被害などの当時の写真を見て、本当に怖いと思ったし、その後の食事も食べたくなくなるほどでした。次に実際に被爆を体験した方にお話を聞きました。インターネットや資料館で見たり聞いたりするよりも実際に体験した方のお話の方が分かりやすく、調べるよりも真実味があって本当に勉強になりました。今回体験したことを通じて、改めて戦争の恐ろしさを知れたし、今後絶対に起きてはならないということを学べました。

●2日目

被爆建物を巡り、なぜ被爆した建物を残したのかを学びました。被爆した建物を残している理由は、爆心地は被害を伝えられる人がいないため、被害を伝えられるのは建物だけだからであり、戦争を二度と起こしてはならないため建物を残しています。特に印象に残った建物は、袋町小学校です。当時は、小学校の中に児童はおらず、みんなが外にいた時に爆弾が爆発しました。小学校は鉄筋コンクリートでできていて、中での被害は少なかったそうです。それとは反対に外にいた人たちの生存率は５%だったそうです。行方不明になった我が子を探そうと階段や黒板などに安否確認のメモをたくさん残したそうです。そのお話を聞いて、一生懸命我が子を探していると思うととても悲しい気持ちになりました。被爆建物巡りを体験してみて、何のために被害のあった建物を残しているのか知れたし、原爆にも耐えた建物がこれからも色んな人の心に残っていくといいなと思いました。

占冠中2年　蠣崎　蒼空

●1日目

平和記念資料館に行き、私は負の感情に引っ張られやすいということを改めて実感しました。

平和記念資料館は少し暗く、静かな場所でした。展示物は被爆した人の遺品や原爆の影響で形が変化した物などが飾られていました。遺品の数々を見ていると心に来ました。深呼吸をしていても心臓の鼓動が収まらないほどでした。

また、被爆者の山本玲子さんのお話を聞きました。家は窓が割れ、タンスが倒れるなど散々だったそうです。数日後、全身にひどいやけどを負ったおじさんが訪ねて来ましたが、必死の看病もむなしく息を引き取ったそうです。

●2日目

ボランティアの斉藤さんと一緒に被爆した建物を巡りました。ほとんどの建物は取り壊されていましたが、近くには石碑が建てられていました。また、改修工事がされた建物もあり、資料館や商店街の一部として今も残されています。旧袋町小学校には生存者を確かめたり、伝言を残したりするために煤のついた壁にチョークを使って書かれた文字が残っていました。他にも、戦艦大和の模型や潜水艦の中を見学しました。

戦争や原爆の恐ろしさをこの2日間で知ることができました。また、広島が被爆して77年が経ちましたが、今では発展した都市として賑やかになっています。

広島を訪れて戦争をしてはいけないと思ったのはもちろん、原爆による惨劇がいかに恐ろしいものかもわかりました。今後、原爆の恐ろしさを後世に伝えられるように励んでいきたいです。

占冠中2年　小瀬　綺乃

●1日目

広島平和記念資料館に行きました。まず始めに、被爆する前の広島と被爆した後の広島を見ました。被爆後は何もかもがなくなっていて、車も電車もなくてとても悲惨な光景でした。

その後、学校で被爆した生徒たちの服などを見ました。服はみな焼けてボロボロで原子爆弾の威力がどれほど恐ろしいかを感じました。

次に被爆の体験をされた方のお話を聞きました。私が話を聞いて印象に残っていることは、黒い雨についてです。原子爆弾が落とされた後、実際に黒い雨を体験した人がいて、当時はそれが恐ろしいものとは気付かずに触れてしまったり、飼っていた動物が変色したり、死んでしまったりしたということを聞き、原子爆弾の恐ろしさを改めて感じました。

●2日目

被爆建物巡りに行きました。まず始めに、袋町小学校に行きました。被害を受けた小学校の中にはチョークで文字が書かれていました。被害を受けた後、小学校は救護所になっていました。その壁には、患者の名前や住所が書かれていて、我が子の安否確認が大変だったということが分かりました。残されている被爆建物が80軒ほどありますが、国が管理しているのは20軒ほどだそうです。私は、被爆した建物が多く残っていて貴重なので、もっと国が管理するといいと思いました。

私ができることは、戦争をすることに反対することです。今、ウクライナが戦争の被害に遭っています。このままだとウクライナにも核爆弾が落とされてしまうかもしれません。そこで、私は積極的に募金などをして、戦争が起こらないように頑張りたいです。

戦争をするだけでも残酷なのに、原爆が落とされるなんてどうしてそんなひどいことができるのだろうと思い悲しくなりました。

占冠中2年　佐々木　琉翔

●1日目

私はこの日資料館で原爆の恐ろしさと悲惨さについて学びました。写真を見るだけでしたがボロボロになった服、戦後の生活や焼け野原になった広島の写真を見ると本当に胸が苦しくなりました。

その後、実際に被爆した方の講話を聞きました。その方は当時小学校1年生で学校にいたそうです。校庭で遊んでいると空が急に光って原爆が投下されました。その後親戚の方や知り合いの方が次々とお亡くなりになったそうです。この講話を聞いて今生きていることが奇跡であり、当たり前ではないということを学びました。

戦争はどんな理由であってもやってはいけないことを改めて学び、今世界中で起きている争いがなくなってほしいと願いました。

●2日目

2日目の被爆建物巡りでは実際に原爆の被害を受けた場所と爆心地を巡り担当の方のお話を聞きました。ここでは、被爆したのになぜこんなにも早く復興したのかという理由を聞き驚きました。その理由は、普通被爆すると放射能を取り除くのに時間がかかりますが、広島は9月に台風が来て放射能が全て海に流れたからだそうです。この話を聞いて広島は本当に奇跡の町だということを学びました。

大和ミュージアムとてつのクジラ館では、呉市の歴史や海上自衛隊の成り立ちなど、普段絶対に学ぶことのできないことを学び良い経験になりました。

今後日本が戦争を始めないために、私は今回学んだことをできるだけ多くの人に伝えていきたいです。

占冠中2年　千葉　朗磨

●1日目

広島平和記念館で私が見たものは原爆の被害の様子です。体をやけどに覆われ、心と体に傷を受けた人もいたり、体が2倍に膨れ上がり、赤や紫色に変色した人を見て、心を痛めた人もいました。それを見て私は、戦争の恐ろしさを体験しました。それに骨すら残らない人もいて、それが自分の家族だったらと思うと、私だったら立ち直れないです。

次に、原爆の飛行機を見た人のお話を聞きました。戦争中で食べ物が少なく、そんな状況で原爆が落ちてとても悲惨なことになっていて、戦争はとても悲惨で、二度と起こしてはいけないものだと気付きました。

最後に、お話を聞いて命はとても大事なもので、命を落としてしまうと、もう戻っては来れないため、自分の命をこれからも大切にしていきたいと思いました。

●2日目

被爆地巡りに行き体験したことは、広島に原爆が落ちてその被害にあった建物を被害にあったそのままの形で残し、若い人たちに戦争の悲惨さや悲しさを伝えているそうです。私は戦争で壊れた建物や亡くなった人たちを見てすごく悲しい気持ちになり、改めて戦争の悲惨さを感じれてとても貴重な経験になりました。

次に私がすごいと思ったことは、原爆ドームを人が工夫して、そのままの形を残していることです。普通なら長い年月が経つと物は脆くなりますが、戦争の悲惨さを人々に伝えるために残されたのだと感じました。

戦争は悲惨であり二度と起こしてはいけないと感じました。

占冠中2年　森田　真央

●1日目

広島平和記念資料館や被爆体験講話を受けて、一つ一つの写真や言葉が心に刺さりました。遺書や当時身につけていた衣服などが展示されていて、胸が苦しくなりました。原爆によって亡くなった人や、取り残された家族の人など、全ての人の人生を一瞬にして台無しにしたことは許されることではないし、これからもあってはならないことだと思いました。

講話では、山本さんという方からお話を聞きました。山本さんは、朝学校の校庭で遊んでいたときに被爆されたそうです。爆心地から約4キロメートル離れていたそうですが、けがをした生徒や亡くなった生徒もいたそうです。友だち、家族、自分の命は大切にしていこうと思いました。

●2日目

被爆建物を巡って、原爆ドーム以外にも爆心地となった病院や小学校、当時のままの壁を見てとても驚きました。

小学校には、子どもを探す親が書いたと思われる文などがありました。それを読み、私は子どもの行方が分からず必死で探す親の姿が想像でき、とても悲しくなりました。

当時は、原爆ドームを見るとあの時のことを思い出して辛くなるからと取り壊しを望む人がいたそうです。ですが、私は原爆ドームなどの被爆建物が残っていて良かったと思います。この建物を通して戦争をしても良いことは何もなく死者が出るだけということ、命がどれだけ尊いものなのかを知ることができるからです。改めて戦争はすごく恐ろしく愚かなものだということを感じました。

トマム学校8年　下川　冬翔

●1日目

たった一つの原子爆弾で多くの人々が亡くなったことやたくさんの建造物が壊されたことについて当時の状況をご講話いただき、服等の資料を見て戦争の悲惨な歴史を知りました。その後の講話では、実際に被爆した人のお話を聞き、食料がなく虫を食べないと生きていけない状況や、やけどだらけになった人々、ぐちゃぐちゃになった家のことなど、戦争がいかに生産性がないか、いかに苦しむ人が多いかを学びました。そして今のウクライナとロシア戦争が無駄で危険だということを前よりも強く実感しました。

●2日目

私たちは被爆した建物を巡りました。爆心地からそれぞれ距離は違うものの、どこもガラスが無くなり、中の人は即死だったといった事実は変わらなかったそうです。鉄筋だけ残った学校の階段の壁などに家族を探したり、自分の安全を伝える伝言等が多く残されており、これを見て、当時の人々の必死さが伝わりました。

これらの建物を見て、今のウクライナの人々もきっと想像できないような恐怖を感じていると思います。そして、改めて、戦争の愚かさ、醜さについて再確認することができました。

トマム学校8年　仙石　桜子

●1日目

私は今回の体験で平和のことについて学びました。

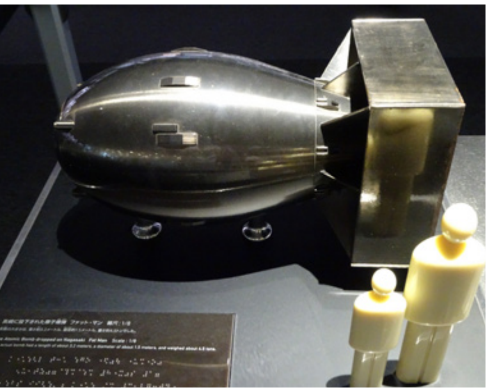
資料館で原爆の恐ろしさや原爆の放射能での後遺症がどのようなものなのかを学び、山本玲子さんのお話を聞くと、家の中は物が倒れ、全身にやけどを負ったおじさんが家に来たので手当をしましたが、おじさんは助からず、その後、雨は黒くなっていたそうで、とても悲惨な状況が目に浮かびました。少しずつ食べるものがなくなっていきイナゴを食べたそうです。

今回の資料館で見たことやお話を聞いて、今後原爆の恐ろしさを人々に伝えていきたいと思いました。

●2日目

今回は被爆建物巡りをしました。今回の体験では、広島市の中心にある被爆の痕跡や、被爆した建物などを見て回りました。被爆した建物などを見て回り、原爆がどれほど恐ろしいものなのかがよく分かりました。そしてあの恐ろしい原爆が落ちた後、学校で伝言を書いた跡が残っており、みんなで協力し合って一日一日を生きていたということが分かりました。また、あの原爆の中でもすべてが壊れず残った建物があると聞き、驚きでした。

今回の体験を通して、私たちが当たり前だと思っていることが当たり前ではないのだと思いました。



引率者（保護者）　下川　園子

原爆・・知っているようで、全く知らないことばかりでした。

被爆体験講話でお話ししてくださった山本さんは、当時7歳だったそうです。爆心地から4.1キロほど離れた長束国民学校に通っていて、8月6日の朝7時9分に空襲警報が出て、7時31分には警報解除となったため、通常通り登校したそうです。登校後、学校の校庭に集まった際、頭上にはキラキラ輝くB29が3機飛んでいたそうです。その後、突然見たこともないような明るい光があふれたと仰っていました。爆心地ではその後10秒で一瞬にして景色が変わってしまったと、被爆建物巡りでは斉藤さんが案内してくださいました。爆心地から半径5キロメートル圏内に86の施設が、被爆施設として今も修復されながら資料館や商業施設(公共所有22か所・民間所有64か所)として残っているそうです。その中でも爆心地から460メートルの距離にあった袋町小学校のお話がとても印象的でした。「二度とあってはならない」という思いで一生懸命丁寧に伝えてくださいました。今回学習の機会をいただくまで、恥ずかしながら戦争は遠い昔の話、これから先、同じことが起こるわけがない。と何の根拠もありませんが日本では平和な生活が当たり前に存在すると思っていました。

戦後77年が経ち、被爆者の平均年齢は84歳となったそうです。被爆した方から直接お話を伺える時間は限られてきているのだなと実感します。また、お話しされている方も減っていく現実に危機感を持っておられました。

核兵器は使われるべきではないものだと多くの方が感じていると思いますが、世界では未だ核実験が行われ、世界に1万3千発以上（2021年1月時点）の核兵器が使用できる状況だということや、現在のロシアとウクライナの戦争が続いている現実。もっと努力をし、自分自身何ができるのかを考え行動しなくてはいけないと考えるきっかけをいただきました。

今回お世話になったお二方とも「命は大切」「核の惨さや恐ろしさ」「二度とあってはならない」と伝え続けてほしいと強く願っておられました。そして伝えていくことの大切さも気付かせてくださいました。

今回の経験をいかし、平和の村宣言をする占冠村で、自分は何ができるのか、何を伝えていけるのかを考え行動に変えていきたいと思いました。

貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。

引率者（教諭）　竹澤　恵里加

今年度も、広島平和記念資料館の見学、被爆体験講話の傾聴そして被爆建物巡りを通じて広島平和体験学習をしました。

今年の被爆体験講話は山本玲子さんのお話を聞きました。山本さんは小学校1年生の時に爆心地から4.1キロメートル離れた学校で授業が始まるまでの時間、校庭で遊んでいた時に被爆された方です。幸い山本さんは大きなけがをすることはなかったそうですが、4キロメートル以上も離れているにも関わらず強烈な爆風が地域を襲い、学校も自宅も爆風で窓や屋根瓦が粉々に吹き飛んだそうです。何が起きたか分からない中、自宅に戻り、防空壕の中で過ごしていたら雨が降り出し、飼っていた猫を見ると白い毛に真っ黒なシミがついていたので雨を手で受け取ってみたら本当に真っ黒な雨だったことに驚いたのを今でも覚えているとのことでした。その当時は、まさかそれが死の雨であることは知らなかったが、自宅の池を見てみると飼っていたフナが死んで水面に浮いているのを見て、ただ事ではないことだけは分かったようです。そうしているうちに、広島市街からやけどをした人たちがぞろぞろと手当や水を求めてやって来て、その中の一人、見知らぬおじさんが山本さんのご家族のところに助けを求めて来たのでなんとか助けようと家族みんなで尽力しましたが、その甲斐なく亡くなられたそうです。弔うために火葬場に行くも焼き場がいっぱいであったため致し方なくお父さんが川岸で荼毘に付したとのことです。

山本さんとそのご家族に大きな被害はなかったものの、この経験とその後元気に生存していた人が心を病んで自ら命を絶ってしまう人たちをたくさん見てきたことで、山本さんが講話の最後に強く何度も何度も私たちに伝えたのは、「命を大切にしてほしい。生きてください。友だちの命も自分の命もみんなの命も大切にしてほしい。」という言葉でした。

広島や長崎というとどうしても核兵器の使用の是非に目を向けがちになりますが、そもそも戦争を起こさなければ核に関係なく自然の摂理に逆らう生命の奪い合いは起こらないのではないでしょうか。

戦争というとどこか自分から遠い感じがして自分は起こさない、国家が勝手に起こすものと思いがちですが、国家をつくるのは国民であり、自分はその一人であることを今一度意識し、戦争を始めないために小さくても自分にできる行動をとっていきたいと思います。

「みんなの命を大切にしてほしい。」との山本さんの願いを大切にして。

三行政区合同で防災訓練実施

非常事態に備えて対策を

８月６日（土）、千歳・本通・宮下の三行政区役員10人による合同防災訓練が実施されました。

コロナ禍による参加者を限定した訓練では、各々の自宅から非常持ち出し品を携行し、徒歩で指定避難所である占冠中学校の体育館まで避難しました。避難後は、非常持ち出し品の必要性等について意見交換を行い、その後AED（自動体外式除細動器）の一般救急講習を受講し、訓練を終了しました。

第34回反核平和の火リレー

平和への思いを走りつないで

７月２７日（水）、広島から受け継いだ平和の灯を掲げ、核兵器の廃絶などを訴える反核平和の火リレーが村内を駆け抜けました。

占冠地区からは７人のランナーが参加。皆さんからの声援を受けながら無事平和への思いを走りつなぐという大役を果たすことができました。

獣魂・鎮魂祭で慰霊と感謝

動物たちからの恩恵に感謝を込めて

８月１７日（水）、了古院敷地内の獣魂碑前にて、占冠村農振興会らをはじめとする占冠村獣魂祭実行委員会主催により、獣魂・鎮魂祭が執り行われました。

家畜などの食糧となる動物や有害動物として狩猟・駆除される鹿や熊など、私たち人間が生きていくための犠牲となった動物たちの御霊に対し、慰霊と感謝の意を祈念しました。

動物たちの犠牲を当たり前のものと思わず、感謝の気持ちを忘れないことが大切です。

自治功労物故者追悼式

占冠村120年の節目を迎えて

８月９日（火）、占冠神社の境内にて自治功労物故者追悼式を執り行いました。

過去に占冠村が行ってきたさまざまな公共事業等に貢献し、地方自治の振興発展に尽力された功労者たちの御霊に対し、田中村長、児玉村議会議長から哀悼と感謝の言葉が捧げられるとともに、遺族らにより献花が行われました。また、先人たちが守ってきた豊かな自然やたくましい精神を後世に引き継ぐこと、そして、ふるさと占冠村の限りない発展を誓いました。